

内臓脂肪/皮下脂肪面積比は内臓脂肪面積より強く冠動脈疾患を予測する

兵庫県立尼崎病院 循環器内科

西城 さやか、宮本 忠司、革島 真奈、鯨 和人、小山 智史、清中 崇司、佐和 琢磨
後藤 太祐、高橋 由樹、棚田 洋平、山本 絵里香、福原 怜、吉谷 和泰
谷口 良司、当麻 正直 佐藤 幸人、藤原 久義、鷹津 良樹

背景: メタボリックシンドロームが内臓脂肪型肥満と種々の危険因子の重積として冠動脈疾患のリスクを増やすことは知られているが、内臓脂肪面積と腹囲の基準は国内と海外で諸説あり依然定まっていない。本研究の目的は冠動脈疾患と関連する内臓脂肪型肥満の指標を探索することである。

方法: 2007年9月25日から2010年8月11日の間に当院で冠動脈CTを施行された連続1200症例のうち、冠動脈疾患の既往がなく、冠動脈が評価可能であった812例について検討した。冠動脈CTで75%以上の狭窄を認めた患者を冠動脈疾患陽性と定義し、臍レベルのCTで、内臓脂肪面積、皮下脂肪面積、腹囲を測定した。高血圧、脂質異常症、糖尿病、慢性腎臓病、喫煙歴の有無および、年齢、BMI、内臓脂肪面積、腹囲、内臓脂肪/皮下脂肪面積比を独立変数とし、冠動脈疾患との関連性を解析した。

結果: 多変量ロジスティック回帰分析において冠動脈疾患の予測因子は、男女ともに、内臓脂肪/皮下脂肪比高値(男性: $p=0.015$, $OR=1.79$, 女性: $p=0.023$, $OR=2.16$)、高齢、糖尿病であった。単変量、多変量解析のいずれにおいても、内臓脂肪面積および腹囲は有意ではなかった。

結論: 内臓脂肪/皮下脂肪面積比は内臓脂肪面積より強い冠動脈疾患の予測因子であり、有効な指標と考えられた。